

文鳥から学ぶ命の尊さ

一年 持塚美希

私は、小学校三年生の時に二羽の白文鳥を飼い始めました。ペットショップでまだ生まれたばかりの小さな文鳥の赤ちゃんを見てとてもかわいかったので、家で育ててみたいと思いました。父母との約束で、命がある生き物を飼うには毎日のえさ替えやかごの掃除、水浴び、放鳥などしっかりと世話をすることが条件でした。

ひなの文鳥は、羽もあまり生えていない小さな体で大きな口をパクパク開けて、一生けん命えさを食べている姿がとてもかわいかったです。そのうというえさをためる袋がいっぱいになると、とても安心しました。

成長するにつれて、羽も増えて、えさも自分で食べるようになり、たくさん飛んで放鳥もできるようになりました。ひなから育てた文鳥は手乗りになり、私の手やかたに乗ってくれるようになり、うれしかったです。口ばしや目の特徴から「はる」がオス、「ふく」がメスということが分かりとてもうれしかったです。目をつぶって眠っている時は、おもちのようにふくらんでくつろいでいます。その姿を見ると、とてもいやされます。

オスのはるが、求愛ダンスと呼ばれる動作をするようになり、しばらくしてふくがたくさん卵を産みました。小さな体で毎日一個ずつ連続して五から六個の卵を産んだのを初めて見た時は、とてもおどろきました。オス、メス交代で卵を温める様子を見たときは、とても感動しました。私達が心配して巣をのぞき込むと、いかくして必死で卵を守ろうとしました。メスのふくは卵を産んでから羽が抜け落ち、体も小さくなってしまい、出産は動物にとっても人間と同じように命がけの行為だと思いました。産卵を繰り返すうちに、メスのふくが卵づまりという病気にかかってしまいました。かごの中でうずくまりながらふるえる姿を見た時は、胸がどきどきして不安と心配な気持ちでいっぱいでした。母と一緒に急いで動物病院に連れて行き、保温と投薬をしてもらい、つまっている卵を取り出してもらうことができました。先生に

「とても危険な状態だったけれど、ふくちゃんががんばりましたよ。」

と言われたときは不安な気持ちが一気に解れて泣いてしまいました。ひなから育ててずっと一緒にいた文鳥達は私達家族の一員になっていました。たくさんある卵の中から一羽ひながかえった時は、家族みんなで大喜びでした。生まれたばかりのひなは羽もなく皮ふがピンクで、体長二センチほどの本当に小さな体でした。耳をすますと小さな泣き声が聞こえてきました。親鳥になったはるとふくはつきつきりで見守り、えさも与えて、子どもを守る親の愛情がたくさんありました。ひなは成長できずに亡くなってしまい悲しくてたまりませんでした。命の誕生の尊さを学びました。

動物を飼うことは楽しいことも悲しいことも受け入れその動物の一生に責任をもつことです。家族である文鳥を大切にしたいです。